

『宝慶由緒記』の史料的价值

石 川 力 山

建長五年（一二五三）、道元という信仰の中心的存在を失った曹洞宗永平寺初期僧団は、その後、三代相論と呼ばれる内部分裂や、永仁五年（一二九七）の火災などにより、物心両面にわたり文字通り荒廢の極に達した。この事態に際し、正和三年（一三二四）、寂円の法嗣で宝慶寺住持義雲は、波多野氏の懇請を受けて永平寺に晋住し、伽藍の復興と同時に『正法眼藏』の書写蒐輯などを通して道元禅の復興にも努力し、永平寺中興の祖と称されることは周知の如くである。そして、以後の永平寺住持職は、義雲の弟子曇希、曇希の弟子以一と、代々寂円系統の人々によって受け継がれ、三十七世石牛天梁に至るまで寂円派に占められるわけである。ただし、二十世門鶴以降は、永平寺に晋住するために寂円派に法を転じた人々であるが、いずれにせよ、中世を通じて永平寺住持職が寂円派により継承されてきたことはまぎれもない事実である。

所で、従来、永平寺を中心とする中世曹洞宗史、就中寂円派の動向については、六世曇希は『義雲録』『学道用心集』

『永平元禪師語録』等を刊行したこと、七世以一は曇希の開版事業を助けたこと、八世宋吾は義雲本系六十卷本の『正法眼藏』を一括書写したこと、十三世建綱は『宝慶由緒記』を撰述したこと、十四世建擲は道元の伝記『建擲記』を撰述したこと等が断片的に知られるにすぎない。しかし中世曹洞宗史の解明には、寂円派の実態の解明が先決問題であり、そのためには、譬えば、永平寺住持の交代毎にその書写を許していたことを記す奥書を有する、永平寺所藏の『仏祖正伝菩薩戒作法』の再検討や、同じく永平寺所藏の七世以一から十七世以貫に至る間の寂円派諸師の頂相群が物語る永平寺における寂円派の動向の検討などを含む、寂円派の史料蒐輯整理は急務である。本論は、『宝慶由緒記』（以下『由緒記』と略称）を手がかりとして、寂円派の伝承とその意味するところ、及び『由緒記』の史料的位置附などを試みんとするものである。

さて『由緒記』は、宝慶寺十四世・永平寺十三世の建綱和尚の撰述で、建綱の永平寺在住中の成立と考えられるから、

十五世紀中葉の記録と見てよい。内容は、寂円の伝歴や宝慶寺開創の由来、二世義雲・三世曇希の伝歴などを伝える、寂円派のまとまった記録としては最古の史料で、初期の寂円派の動向を探る上からは欠くことのできない史料であり、三代相論に関しても重要な示唆を与えてくれる記録とされている。ただし『由緒記』がいかなる立場から何を意図して残された文献かという点に関しては従来殆んど考究されていないので、この点について考えておく必要がある。

まず、『由緒記』に代表される、寂円派が伝える永平寺住持の世代列次がいかなる意味を示唆しているかが問題となる。

現在永平寺で用いている世代列次は、五十世玄透即中が世代改めを行い改訂したもので、建綱は十三世となっているが、『由緒記』の末尾には「永平伝法第十二世兼宝慶伝法第十四世嗣祖比丘建綱、為後鑑証記焉」とあり、自ら永平寺十二世であると明記している。この相違は、義介や義演を正式な永平寺世代から除き、第一世道元、二世懷昇、三世寂円、四世義雲として算定した結果によるもので、これは『由緒記』の、

（義雲は）誠是道元禪師伝法第四世孫、宝慶二世、永平寺中興也。因斯寂円禪師為本山之第三祖嗣書・血脉分明也。永平寺宝慶寺於裂（列カ）祖開基檀那牌面不書別号、例道元禪師者也。且又伝法之、二字別而大切書之、為明正敵（嫡カ）也。

という主張に基づく。このような寂円派の伝承がいつ頃から

意識され主張されはじめたかは不明であるが、義雲は自ら鑄造させた嘉暦二年（一三二七）の梵鐘銘で「住持第五代」と明記しており、師の寂円を三世として自らを四世とする意志はなかったと見てよい。ここで永平寺の住持世代の実態を、寂円派以外の伝承史料によつて確認しておく必要がある。

譬えば、一般に中世永平寺は寂円派が綿々とその法灯を継承してきたかに見られるが、実は、寒巖派の華藏義曇や、曇英慧応等の峨山派の人々など幾人かが永平寺住持として拝請されたり、後世の瑞世のような形で永平寺に拝登し、永平寺の前住という称号を貰っていることが知られる。即ち『參州法泉寺旧記』によれば、享徳二年（一四五三）華藏は永平寺の請を受けて十八世として入院し、八日間住したとされ（佐橋法竜『瑩山』²⁹）、あるいは明応五年（一四九二）頃、曇英は主席を欠いた永平寺に晋住したとされており（『曇英和尚行状』『双林寺聯燈錄』）、また安芸洞雲寺金岡用兼は衰頹した永平寺の伽藍の復興に努力し、師の為宗仲心とともに永平寺に瑞世し前住という称を用いている。さらに永平寺十九世祚球は、信濃竜雲寺・興源院等に盛んに瑞世を勧誘している（『竜雲寺文書』『興源院文書』）。ただここで注意しておきたいことは、永平寺に正式に住持し入院開堂することと、前住・前永平等の称号を貰うだけの所謂瑞世とは明確に区別しておく必要があることで、華藏や曇英の永平寺晋住が果して正式な

住持か否かは疑問である。一方『曇英和尚行状』によれば、前永平中（仲カ）心和尚、他門、耆宿、遷越竜泉寺同門諸相誼、虛永平主席、請師（曇英）補之。師希隱逸不敢就。諸老推獎甚親切、不克辭起著紫衣、兼德爵齡達尊也。

とあり、金岡用兼の師為宗仲心について、「前永平」という称を用いているが、「他門耆宿」と明言している点など、明らかに寂円派とは異なる人が永平寺住持に名を連ねていることが意識されている。つまり、寂円派の永平寺晋住と他派の晋住とは嚴格に区別されていたのであり、それは前永平・前住永平などの称号を使用できるに止まる、後の瑞世と同様の性格をもつものであつたと見てよい。そして、曹洞宗における瑞世の制度がいつ頃から慣例化したかは不明であるが、内容的には、金錢を納めるだけで官寺の住職の名義が得られるという、五山派における坐公文或いは居成公文の制度と同様の性格を持つものと見られる。しかも寂円派以外の人々が永平寺住持に名を連ねる時期は、永平寺は例外なく何らかの理由で堂塔伽藍が衰頹しており、このような制度を生み出したのは、伽藍復興のための苦肉の策であつたと見られる。

譬えば、文安年中（一四四四・四八）、竜文寺器之為璠は永平寺に登りその衰頹を嘆いているが、華藏の永平寺住持はこれを承けるものであり、嫩祐祐栄や茂林芝繁の永平寺入寺もこの時期と見られる。また文明五年（一四七三）永平寺は失火

により諸堂や勅書まで焼いたことが知られているが（『結城安穩寺記録』）、為宗仲心や金岡用兼の永平寺復興の努力はこれに承けたもので、曇英の永平寺晋住もこの時期である。さらに天正二〇年（一五九二）頃の祚球による瑞世勧誘の前提となるのが、天正二年の一向一揆による永平寺破却である（『越前国名勝志』）。祚球が竜雲寺に出した瑞世勧誘の書状は、

当寺（永平寺）住持職之衰就テ、伽藍修造請状之儀、貴寺江被宛行旨評定畢、然者急度瑞世所希也

天正二十壬辰年

仲春十八日

進上竜雲寺衣鉢閣下（『竜雲寺文書』）

（朱印）
祚球（花押）（印）

というものであり、永平寺住持と伽藍修造の依頼とは巧みに一揃いになったものであることが看取される。そしてこのような伽藍修造の見返りとして永平寺住持の称号を与えるという、苦肉の策から生ずる永平寺世代の混乱を危惧し、これに対処するため、永平寺は代々、世代列次と伝法の次第は同じでなければならぬという寂円派の主張が起り、これに従つて三世寂円・四世義雲・五世曇希以下の世代が要請されていたと考えられる。この主張の萌芽をなすのが『由緒記』で、特に伝法の二字は大切にしなければならないとし、建綱自身も永平伝法十二世であることを強調する。かくして寂円派の伝法がそのまま永平寺の伽藍法に意味が転化していくの

である。但し、建綱の弟子建撕はその著者『建撕記』で、義介も義演も永平寺に住したことを認め、義雲は五世、曇希は六世であることも明記しており、寂円を三世に立てるといふ説は、建綱・建撕師資の間ではそれほど確定的な主張にはなっていないかつたと見られる。しかし、前述の如く永平寺には中世寂円派諸師の頂相群が所蔵されているが、これらの中には「□住永平、伝法十五世、宗縁自賛」「永平、伝法十六世、以貫自賛」等のような自賛の語を附するものもあり(笛岡自照『永平寺雜考』55頁)、これらの頂相が製作された時点では既に伝法ということと永平寺住持とは不可分の関係にあり、寂円を三世とする世代列次が確定していたことが知られる。

またこのような世代列次に関連して、義介・義演をいかに処遇するかということが次に問題になるが、これについては、所謂三代相論をいかに理解するかということに問題は集約される。即ち、史実は別として、『建撕記』が伝える寂円派の伝承としての三代相論は、義演寂後に誰を三代とするかを義介と義演の徒が争い、結局解決せず、義介・義演の位牌には何代と書かずに「前住」と書くことにしたというものであるが、この前住という言葉は極めて便宜的呼称で、ある意味では正式な住持とは認められないという意味も内包している。かく見てくると、『由緒記』が伝える「正和年中永平寺義演禪師遷化、斯時有三代相論、永平寺及大破滅法。」という三代相

論の記事も、この事件が義演寂後に起つたとする点で共通しており、義介・義演の永平寺における位置を前住という極めて曖昧な形で処遇しようとしている点でも軌を一にしていると見てよい。従つて、このような三代相論の扱い方は、永平寺の世代を義介・義演を除いた寂円派の伝法の次第に転化するための伏線であつたと見ることも可能であろう。

以上の諸点を結論的にまとめてみると、まず『由緒記』は初期の寂円派の動向を伝える最古の文献史料で、寂円の行状や義雲の法語などは極めて古い伝承を持つが、永平寺の世代列次に關しては、義介・義演を除き、寂円を三世、義雲を四世とする寂円派の主張の先驅をなす史料である。そしてこのような主張が起つてきたのは、伽藍の衰頹に際してなされる他派の永平寺晋住に對し、自派の法灯を明確に區別しておく必要があつたためと思われる。ただしこのような主張は、建綱・建撕師資の頃はまだ固定化していなかつたが、義介・義演を前住という形で処遇し、正式な住持とすることに躊躇している姿勢が見られることは、寂円派の意図はほぼ明確化していたのであり、この主張が確定した時点で出現するのが一連の寂円派諸師の頂相群である。かく考えてくると、『由緒記』の出現はこの時期の寂円派の胎動を端的に物語り、伝法と伽藍法の一致を目差す、史実とは異なる寂円派の要請としての主張を多分に含むものであつたといふことができよう。